平成23年度　開成中学校（国語）　解答・解説

解答

一

問一　お母さんが許可してくれたのに、内緒で付いて来たということは、ミキちゃんと二人だけで県民ホールへ行ったのは、やはり悪いことだったのではないかと思われ、お母さんに裏切られたように感じたから。

問二　ミキちゃんを連れて来なかった自分に対して怒っていると思っていたが、ミキちゃんを悪く思っているのではないかと思うようになった。

問三　ミキちゃんとの友達関係が心配で、宇佐子の行動や気持ちを探ろうとしながらもうまくいかず、とまどい動揺するお母さんの気持ち。

二

問一　あるがままの自然の循環に従い、単調だが規則正しく繰り返される日常生活を大事にし、スケールの大きい時空の中で考え、行動すること。

問二　近代の価値である変化や進歩にも大きな影響を受けず、近代以前に作られながらも、現在、最も優れた都市環境を誇っている点。

問三　自分の実力を存分に発揮して

問四　野に咲く名もない草の花のようなものでさえ「がんばるわ」と言いかねない、だれもかれもが「がんばれよ」「がんばります」と言う、世の中に「がんばる」が氾濫しているイメージを与える役割。

問五　一　郷里　2　好転　3　禁句　4　意味深長

解説

一

出典は、中沢けい「うさぎとランペット」。

問一　「インチキだという腹立ち」ですから、お母さんにごまかされた、だまされたと感じていることがわかります。さらに――線部直前に「そういう後ろめたさがあるから」とあります。夏休み前に、学校で配られたプリントに「子どもだけで遠出はさせないでください」とあったことも思い出し、ミキちゃんと二人だけで県民ホールへ行ったのは悪いことだったのではないかという「後ろめたさ」を感じています。しかし、お母さんが許可してくれたことが、その「後ろめたさ」を打ち消してくれるはずです。ところが、許可してくれたお母さんが内緒で後から付いて来ていたとなると、ミキちゃんと二人だけで県民ホールに行くことは、やはり不都合なことだったのかとなります。「許可したのに、内緒で付いて来るお母さんは、宇佐子を裏切っているような感じがしてならなかった」という表現に注目しましょう。

問二　――線部直前の三行。「いつもなら、宇佐子は頬をふくらますと、怒っているお母さんも怒った顔の下に、そっと微笑が浮かぶ」はずなのに、今日は、「怒っている顔の下に微笑」が浮かばないことに宇佐子は気づきます。「あれれ？　怒っているんじゃないのかな」「なんだか怒られているのと微妙に違う」――そして、「…お母さんも何も言わないから、宇佐子はますますお母さんがミキちゃんのことを悪く思っているように思えて仕方がない」という心境に至ります。

問三　――線部直後、問題文の最後の二行に「先刻の黒い鳥と……お母さんの白い喉が、まるでオセロゲームの駒の裏表のように思えてきた」とあります。ここから、「黒い鳥」＝「お母さん」と宇佐子がとらえていることがわかります。――線部では、「先刻の鳥はお母さんが宇佐子の様子を見に来させたの」ではないか、と宇佐子は想像しています。また、現実にお母さんは内緒で二人の後を県民ホールまで付いて来ています。ミキちゃんとの友達関係が心配で、宇佐子の行動や気持ちを探ろうとするお母さんの姿がそこにはあります。しかし、いずれの場合も失敗しています。「本文の最初に描かれている『鳥』の様子をふまえて」――「宇佐子の声に驚いた鳥は～自分で自分の動きが解らなくなったようだ。～あわてた様子で～」――宇佐子の行動や気持ちを探ろうとしてうまくいかないお母さんのとまどいや動揺が、鳥のあわてふためく姿を通して暗に示されています。

二

出典は、坪内稔典「大事に小事」。

問一　「過疎」とは、「変化や進歩」に価値を見出す、近代百年の価値観を基準にした言い方、「特殊な近代」を基準にした言い方にすぎないのではないか。と近代の価値観に疑問を投げかける「近代（現代）文明批判」の試みです。「変化しないこと、進歩しないことの価値」を求め、見出すという「生きる知恵」があるのではないかという提案です。「どういうことだと思いますか。自分の言葉でわかりやすく説明しなさい。」という設問文からも、ある程度の許容範囲のある問題を考えてよいでしょう。ヒントとしては、「百年という時代は、人類や宇宙の気が遠くなるような長い歴史のほんの一瞬にすぎない」「退屈きわまる時間の中にある充足感や悦楽」「その都市（城下町）の原型は近代以前に作られた。近代の価値である変化も進歩も、町の姿を変えてしまうほどには力を発揮できなかった」

などが文章中にあります。人間が生きること（価値）を大きく支えているもので、「変化しない」「進歩しない」ものを考えてみましょう。

問二　「変化や進歩」に価値を見出す近代（現代）に対する批判が基調ですから、「その都市の原型」が「近代以前」の価値観・考え方によって作られていることは「良い」点の一つです。しかも、「近代以前に作られ」ていながら、「今日においても日本のもっとも優れた都市環境を誇っている」点は、「良い」と考える根拠になります。

問三　「本文全体から読み取れる筆者の考え方にしたがって」「がんばる」を『別の言葉に』に言い換え」る――なかなか、重い条件ですが、すでに見てきたように、「変化や進歩」に価値を見出し、国を挙げて「がんばる」日本（人）の「思考の回路」に逆転の発想を求める筆者です。他者との比較や競争の中に自分を置くのではなく、「百人の子供たちが自分を伸ばす」とあるように、ひとりひとりの成長を促すような励ましの言葉としての「がんばる」を考えましょう。

問四　「一億二千万人がいっせいに『がんばっている』よう」な、「がんばる」が氾濫している世の中に対するささやかな批判の冒頭に置かれた一句であることに注目します。野に咲く名もない「草の花」は、平凡に生きる名もない普通の人々の比喩と考えてよいでしょう。だれもかれもが「がんばれよ」「がんばります」と言う。「がんばる」が氾濫している世相に対して、「がんばるわなんて言うなよ」と作者（筆者）はたしなめずにはいられなかったのでしょう。